日本教育新聞
2013年12月16日

自力で課題解決へ ICT機器活用

小中一貫カリキュラムも作成

京都市立一橋小学校

（公財）パナソニック教育財団の特別研究指定校として、京都市立一橋小学校（藤田彰校長、児童149人）では、ICT機器を活用しながら「自らの力で進んで課題を解決する子」を育てている。同校は本年度で閉校し、来年度から3小、1中が統合した小中一貫教育校「東山泉小中学校」として新たなスタートを切る。それを見据え、「情報活用の実践力」を系統的に育成する「小中一貫カリキュラム」を作成した。学力向上を目指して言語活動の充実を図るなど、授業改善にも力を入れている。

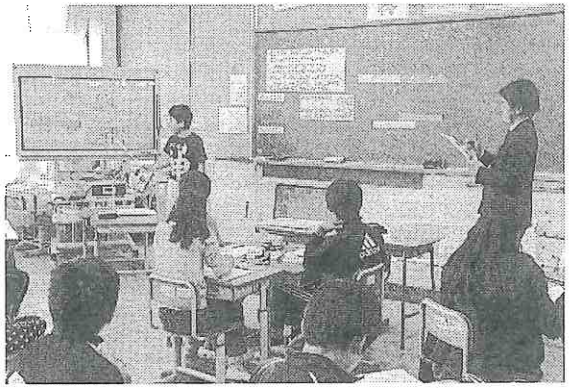
情報整理し考えを説明

「みかんに手をあげた人は18人。バナナに手をあげた人は20人。そのうち両方に手をあげた人は11人でした」

課題文を読んだ後、学級担任の三木隆史教諭が「両方に手をあげた人に、みかん1個、バナナ1本を配る」などの条件を加えていく。これは6年算数「場合を順序よく整理して」の授業。本時の授業では、必要なみかんとバナナの個数について考えた。

課題解決に向け、まず問題文から「みかん18人」などの使える情報を整理。そして「求めたいこと」は何かを全体で共有し、問題文をそしゃくしながら解決への見通しを持たせた。課題把握や自力解決の場面では、情報を整理できないまま問題を解こうとする子もいる。そうなってしまうと、見当外れの答えを導き出してしまうことがあるからだ。

課題解決への鍵は「重なり」の部分。途中、図や表などを使って自分の考えを描いたノートを大きく画面に映し、説明させる場面もあった。さらに全体で交流して間違いなどに気付かせ、子どもたちが自ら説明できるようにすることで理解を深めていく授業展開の工夫なども見られた。



ノートを拡大提示し、自分の考えを説明する児童

学力に還元させる

「研究のための研究で終わってはならない」。そう考える同校では、研究が子どもたち一人一人の学力向上につながっていくように心掛けている。そこで子どもたちにも分かりやすいように、「情報活用の実践力」を①「集める力」②「まとめる力」③「伝える力」―の三つに分類。子どもたちが主体的に問題解決できる力が付くような筋道にしている。

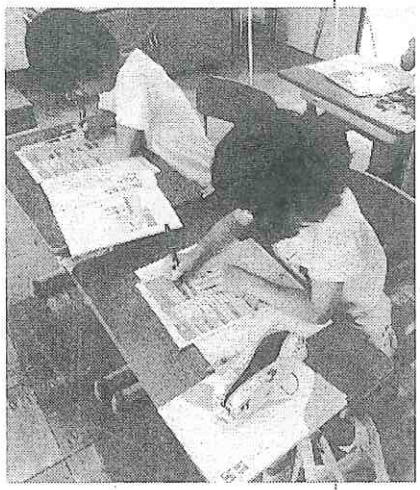
これまでの研究を踏まえ、聞き手にうまく伝えるためには話で扱う内容が重要になると考えた同校。国語と算数に特化し、本年度は情報を収集して調べたり、比較してまとめたりする「集める力」に力を入れて取り組んでいる。全国学力・学習状況調査の結果でも、「関連付けて考える力」に課題があったことを踏まえた形だ。そのため、教師は常に「情報を集める場面はどこか」を念頭に置き、単元や授業を構成するようにしているという。

スタンダードに

家庭学習や自主学習で「情報活用の実践力」が意識できるよう、同校では「情報活用の実践力」を示した学習支援カードを作成し、活用している。単元導入時、まずは何を学習するかは学習支援カードを使って確認。そして実際に家庭学習などで使用する場合は、チェック項目に記入しながら情報の集め方やまとめ方を意識して学習できるようになっている。

来年度から小中一貫教育校「東山泉小中学校」となる。これまでの実践などを踏まえ、中学校カリキュラムは国語、技術科を中心に「小中一貫カリキュラム」を作成した。研究主任の木村明憲教諭は「来年度からの学びの単元の導入で学習支援カードを使い、何を身に付けるかを確認している―スタンダードになれば」と期待を寄せる。また、他教科などでの活用も視野に入れている学習支援カードについては「中学校版ハンドブックのようなものを作成していきたい」と話している。

一橋小☎075・561・3170



小学校